

# ヨシ紙で保全もヨシ

福井県の越前和紙メーカーが、淀川河川敷の鶺殿地区(大阪府高槻市)に広がるヨシ原を守るべく、ヨシを漉いた和紙の生産を始めて10年目を迎えた。鶺殿のヨシが雅楽器「ひちりき」の材料に用いられる縁で雅楽師の東儀秀樹さんが、今春発売されたヨシ紙のハガキなどにイラストを提供した。

(笹川翔平)

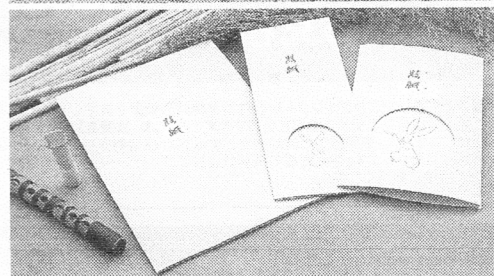
## 淀川・鶺殿

鶺殿は「土佐日記」にも登場する歴史的名所。ヨシ原は1970年代に始まった河川改修事業で激減したものの、その後の保全活動で回復した。多年草のヨシは毎年刈り取る必要があり、ボランティアが作業にあたるっている。しかし、すだれ作りなどがすたれたこともあり、刈り取られたヨシは行き場をなくして燃やされるしかなかった。

地元で鶺殿ヨシ原研究所を主宰する小山弘道所長(79)は99年、琵琶湖のヨシ保全を訴えるイベントを通じて、山田兄弟製紙(福井県越前市)の山田益弘社長(現会長)と出会った。「淀川でヨシを育てている」と語る小山所長に「紙にしてみましよう」と山田社長が応じた。

ヨシは木材パルプと比べて繊維が短く、強度が劣る。同社はすき方を工夫し、2年がかりでインクジェットプリンターに耐えうる強度を実現。30%のヨシパルプを混

## 市民と業者、連携10年目／東儀さんも協力



ぜた和紙は漂白剤を加えない生成りで、柔らかな手触りが特徴だ。2001年にヨシ紙の便せんやハガキを売り出したころは月数千円分しか注文がなく苦戦したが、環境意識の高まりで売りは徐々に伸びた。同社取締役の山田京代さん(45)は、「自分たちは廃水で川の水を汚している立場。水質浄化作用があるヨシの保全にかかわることで環境の負荷をゼロに近づけたい」。02年から毎年1月と

2月、社員総出で鶺殿のヨシ刈りを手伝っている。昨年4月、鶺殿を横断する高速道路の早期建設を橋下徹・大阪府知事が国に要望した。これに対してヨシ原の保全を求める雅楽奏者や愛好家が昨夏、2万人以上の署名を集め、文化庁などに提出した。

鶺殿のヨシでできた吹き口のひちりきを愛用する東儀さんも署名活動に参加。昨年6月、小山所長から「鶺殿のヨシの知名度を上げるのは雅楽、守るのは紙。その両方がかかわる製品作りに協力してほしい」と関係者を通じて頼まれた東儀さんは、うさぎが雅楽器を奏でる姿をイラストにした。

- ① 鶺殿のヨシ刈りの様子。山田兄弟製紙の社員もボランティアで参加した＝1月、大阪府高槻市鶺殿
- ② 鶺殿のヨシで作られた「淀の音色」シリーズ。東儀秀樹さんがうさぎのイラストを描いた＝いずれも山田兄弟製紙提供

東儀さんのイラストが描かれたヨシ紙の展示会が7月6日～8月6日の午前10時～午後5時、大阪府枚方市岡本町のアトリエMay(072・844・1440)である。

ハガキセット(3枚入り、税込み500円)、一筆箋セット(10枚入り、同500円)、レターセット(便せん12枚、封筒5枚入り、同1800円)は「淀の音色」シリーズとして今年4月に発売され、同社のホームページ(<http://yamada-keitai.com>)で購入できる。「手紙になって遠くへ運ばれるヨシ紙に、小さく『鶺殿』と書いてある。受け取った人がそれを見て、ちょっと行ってみようかな、と思ってくれたら」と小山所長。売り上げの一部は、ヨシ原の保全活動に寄付される。